厚生科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

分担研究報告書

川崎病の治療と長期管理に関する研究

主任研究者名：加藤裕久（久留米大学医学部小児科）

昭和 20-30 年代の川崎病発症に関する研究

分担研究者名：賀藤均（東京大学医学部小児科）

研究協力者名：渋谷紀子,柳澤正義（東京大学医学部小児科）

研究要旨＝日本における川崎病の発症がいつ頃から見られたかを検討するため、昭和 20-30 年代の東大小児科の入院カルテの調査を行い、昭和 25 年頃から川崎病と診断し得る症例が存在したことが明らかになった。

研究目的＝川崎病は 1967 年（昭和 42 年）に川崎富作氏によって「指趾の特異的落屑を伴う小児の急性熱性皮膚粘膜リンパ腺症候群」として発表されてから 30 年以上が経過し、何回もの全国調査が重ねられ、その疫学については詳細なデータが得られているが、日本にいつ頃から存在していたものであるかは明らかでない。今までの報告では昭和 27-28 年頃が最初と推定されている。昨年我々は、昭和 30 年代に東大小児科に入院した患者のカルテを調査し、現在の川崎病の診断基準を満たすと考えられる 5 症例を見い出した。今回はさらに遡って、昭和 19 年から 29 年の入院患者のカルテを調査し、昨年同様、川崎病との異同について検討したので報告する。

研究方法＝昭和 30 年から 40 年の間に当院小児科に入院した患者のカルテについては、アレルギー性中毒性発疹、Stevens-Johnson syndrome、結節性動脈周囲炎と診断されたものを抽出して調査したが、昭和 19 年から 29 年の入院カルテについては、上記 3 病名に該当する症例がなかったため、以下の病名で診断されたものを抽出して検討した。

3 歳未満の猩紅熱、Still 病、　原因不明の発疹、　頚部リンパ節炎、
不明熱、　異型猩紅熱、
伝染性単核球症、　泉熱、　敗血症、
心内膜炎、　多形浸出性紅斑、
非定型麻疹

これらの症例につき、厚生省川崎病研究班の作成した川崎病診断の手引きと照合し、川崎病との異同ついて主要６症状の有無を中心に検討した。

結果と考察＝昭和 30 年から 40 年の間に東大病院小児科に入院した患者 4350 名のうち、方法で述べた診断名を有する患者は 60

名であった（表１）。猩紅熱は 20 年代を通してほぼ同じ頻度で認められたが、泉熱は 1950 年頃から出現した。

上記の 60 例につき、厚生省川崎病研究班の作成した川崎病診断の手引きにおける主要症状との比較を行った。主要症状 5 項目以上陽性の症例は今日の診断基準を満たすものであり、川崎病と診断し得るが、計 5 例存在し、また、その他にカルテの記載から川崎病であったことが強く疑われる症例が 1 例認められた（表 2)。これら 6 例の年齢は 9 か月から 5 才 8 か月で、最終診断は頚部リンパ節炎が 1 例、猩紅熱が 1 例、泉熱が 4 例であった。

昭和 27 年から 29 年の 4 症例はいずれも泉熱（または泉熱の疑い）と診断されていたが、28 年から 29 年の 3 症例は川崎病の主要症状 5 項目以上陽性で、四肢末端の変化についても明らかな記載があった。昭和 27 年の症例は急性期に他院に入院していたため臨床所見は明らかでない点も多いが、BCG 接種部位の明らかな変化を伴い、指先から手掌に広範囲な皮膚落屑をみたことなどから、川崎病であったことが強く示唆された。昭和 26 年の症例は猩紅熱と診断されていたが、四肢末端の変化が著明で、主要症状 6 項目すべてを満たし、今日であれば確実に川崎病と診断される症例と考えられた。昭和 25 年の症例は頚部リンパ節炎と診断されていたが、主要症状のうち 5 項目が陽性であった。以上の 6 例は全例が軽快または治癒にて退院しており、その後の経過については不明である。昭和 19 年から 24 年の間には明らかに川崎病であったと判断できる症例は見い出せなかった。

結論＝東大小児科に昭和 19-29 年の 11 年間に入院した症例のうち、今日の川崎病の診断基準に適合すると思われる症例が５例得られた。今までの報告では、日本において川崎病は昭和 27-28 年が始めと推定されてきたが、今回の調査で昭和 25 年に症例が認められたことから、さらに川崎病の発生時期について検討する必要があると考えられる。

表1　昭和19-29年に東大小児科に入院した症例のうち検索の対象とした診断名

	1944	1945	1946	1947	1948	1949	1950	1951	1952	1953	1954	計
3歳未満の猩紅熱	4		3	1		1	1	1	1	1	3	16
Still病	2					1		1				4
原因不明の発疹	1		1	2	1					3	1	9
頚部リンパ節炎	1						1				1	3
不明熱		1			1		1					3
異型猩紅熱			3						1			4
伝染性単核球症						1	1					2
泉熱							1		3	3	3	10
敗血症						2	3			1		6
心内膜炎							1					1
多形浸出性紅斑								1				1
非定型麻疹								1				1
計	8	1	7	3	2	5	9	4	5	8	8	60
全入院数	557	201	280	320	315	360	355	410	450	505	597	4350

表2　川崎病の可能性があると考えられた症例

年	名前	年齢	性別	最終診断	発熱日数	四肢末端の変化	発疹	結膜充血	口唇口腔病変	頚部リンパ節炎
S25	K.I.	5Y8M	M	頚部リンパ節炎	10	記載なし	+	+	+	+
S26	I.W.	2Y10M	M	猩紅熱	15	+	+	+	+	+
S27	M.Y.	9M	F	泉熱	15	+	+	急性期他院入院のため不明		
S28	N.K.	1Y1M	M	泉熱の疑い	9	+	+	記載なし	+	+
S28	Y.S.	4Y0M	M	泉熱	14	+	+	+	+-	+
S29	E.K.	9M	F	泉熱	20	+	+	+	+	+